

## [生徒指導]

## 不登校児童を継続的に登校させるための取組

ーメンタルフレンド的な視点に基づく関わり方とルール・体制づくりを軸にした実践を通してー

高橋 雅彦\*

## 1 課題設定の意図

文部科学省の学校基本調査速報によれば、平成19年度に病気や経済的な理由以外で年間30日以上欠席した「不登校」の小中学生は、前年度より1.9%増の129,254人となった。これは2年連続で増加傾向を示している<sup>1)</sup>。新潟県は、不登校の小学生は前年度より4人減少し、425人となった。一方、中学生は58人増加し、1,938人となっている。筆者の勤務する十日町市内では、小学校は20人、中学校は65人の報告があった。これを発生率で見ると、小学校は0.61% (H18の全国0.33%)、中学校は3.69% (H18の全国2.86%) と大変高い割合となっており、その未然防止や解消が大きな課題となっている<sup>2)</sup>。

平成19年度は当校においても表1のように不登校が急増した。母子登校2人を含めると8人となり、発生率で2.2%という危機的な状況が生じていた。今年度、6年生2学級の一方を私が担任をすることになった。そこには、2人の不登校児童がいた。2人の4年生時の欠席日数は30日未満で、不登校には該当しなかった。しかし、5年生になると欠席日数が増加し、A児は37日、B児は92日であった。この2人に対し、学級担任としていかに対応するか、更に学校全体としてどのような指導体制で児童や保護者に臨むべきかが課題となった。

表1 当校の不登校児童(母子登校を含む)の5年間の推移

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
平成16年度	0	0	1	0	0	1	2
平成17年度	1	0	0	0	0	0	1
平成18年度	0	1	0	0	0	0	1
平成19年度	0	0	2	3	2	1	8
平成20年度	1	0	0	2	0	2	5

※平成20年度は8月現在、不登校傾向の見られた児童数である。

## 2 研究の目的及び方法

不登校児童の指導・支援を考える際に大切なことは、本人は今、どうしたいと考えているのか、保護者は何を願っているのか、学校として何ができるのかを明らかにし、具体的な取組をステップを踏んで設定することである。A児、B児ともにいじめや登校の障害となる根本的な要因は確認できなかった。しかし、2人とも複雑な家庭環境をもち、A児は弟の誕生による母子分離不安、B児は姉2人の不登校の影響など、様々な条件が絡み合っていることが考えられた。2人の保護者は継続登校を望んでおり、学校への児童の送迎は可能な状態にあった。また、2人とも登校後は授業に参加することができる状態だった。

林(2001)は、登校するために、同時進行しなければいけない3つの要素として、①「子どもの性格を学校や社会で通用するようにする」、②「今の毎日の生活を学校や社会を見ながらの生活に変えていく」、③「大学生のお兄さん、お姉さん(子どもたちのメンタルフレンド:年齢差の小さい、信頼できる人)」を挙げている。そして、継続登校の重要性とともに、不登校を発達段階の小さいうちに克服する必要性を訴えている<sup>3)</sup>。

私はこの「メンタルフレンド」の必要性という考えに注目した。児童への接し方として、教師という指導する立場より、一歩児童に近づいた関係をもちたいと考えた。それは以下のようなメンタルフレンド的な視点に基づくものである。

\* 十日町市立十日町小学校

- ・児童と共通の趣味や価値観をもち、休憩時間中の話し相手や遊び相手になる（共有）。
- ・児童本人からの要望がない限り学力強化の要求をせず、児童の側に立った表現を心がける（代弁）。
- ・母親を含めて、児童が学校の内外で孤立しないように支えとなる（支持）。
- ・身近な先輩としての役割を意識し（モデル）、兄弟姉妹のような接し方をする（つなぎ）。
- ・大人、子どもを問わず、児童を取り巻く関係性の活性化を図る（促進）。

長谷川（2000）は、メンタルフレンドの特徴として、心理学を専攻する学生に限ること、研修・助言システムを重視することを挙げている<sup>4)</sup>。私には、大学、大学院在籍中に学習心理学や発達心理学を専攻していた経験がある。メンタルフレンド的な関わり方をすることで、林の論ずる「子どもの性格の見極め役」となり、「学校に行きにくい問題の処理」をするとともに、「子どもが常識を学び取る」ことができるようにした。そして、A児とB児に対し、次のような段階をふまえて指導することが継続登校につながると考えた。

- I 共通の話題で自由に会話をすることができ、お互いにふれあうことができる段階
  - II 「できること」と「できないこと」の判断をしたり、約束事を決めたりするなどの関係をもつことができる段階
  - III わがままを抑えたり、我慢することの必要性を認識させたりして、集団行動に参加させることができる段階
  - IV 他の児童との関わりをもたせ、学級内や学校内で一緒に過ごす時間を増やすことができる段階
- 以上の段階的なアプローチをふまえ、次の4つの観点から継続的な登校の実現に向け取り組んだ。

- (1) 欠席日数を増やさないためのルールづくり
- (2) 指導を受け入れやすくするための人間関係づくり
- (3) 登校させるための保護者の協力体制づくり
- (4) 登校後の級外職員の支援体制づくり

4つの観点を生かした取り組み方を図1のように構想した。

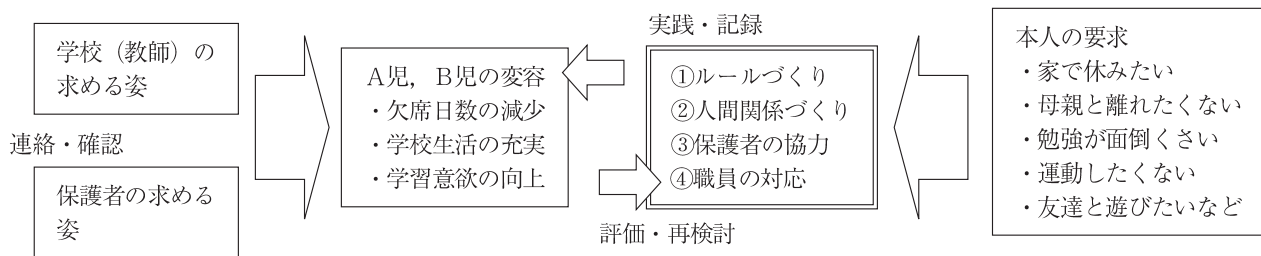
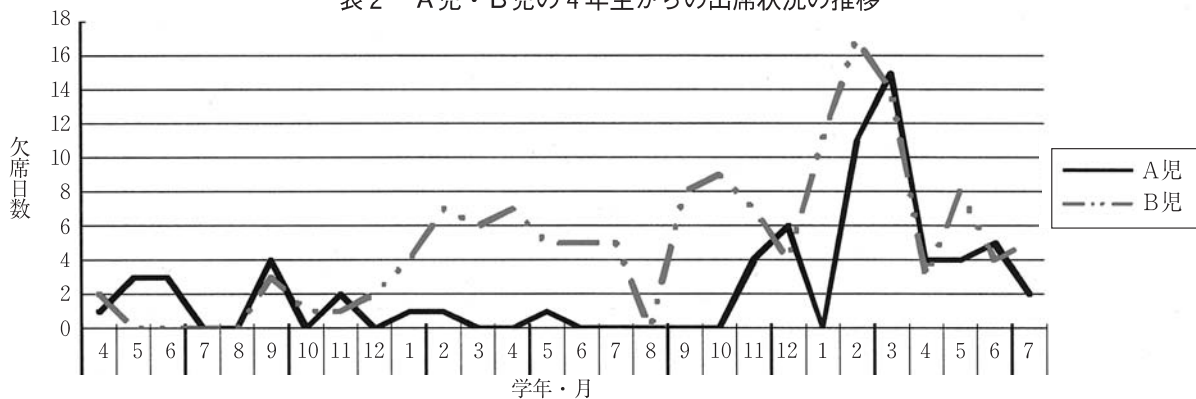


図1 A児、B児に対する取り組み方の構想図

### 3 実践の内容

#### (1) 不登校児童の概要

表2 A児・B児の4年生からの出席状況の推移



#### ① A児（女子）について

4人兄弟の二女、母子家庭。父親と母親は離婚し、長女は父親と一緒に離れて暮らしている。一昨年、内縁の夫と母親との間に二男が誕生した。A児は母親に甘えたいために、母子分離不安状態が見られるようになった。表2のように5年生の2学期から遅刻や欠席日数が増え、2月から急激に欠席が増加している。3月の登校日数は1日のみであった。自己表現が苦手で、友達の言動を気にし過ぎる傾向がある。そのため友人関係をうまくつくることができず、学級内で孤立することがしばしばある。

## ② B児(男子)について

4人兄弟の末っ子。姉が3人いるが、そのうちの2人は中学校時代に不登校であった。学習に対する意欲が低く、読書以外の学習には進んで取り組もうとしない。4年生の3学期から欠席することが多くなり、5年生から不登校状態となる。自分から進んで友人関係を築こうとはしないが、周囲の児童はB児を受け入れている。グループ活動などには問題なく参加することができる。肥満度が高いせいか、運動が苦手である。

### (2) 継続登校に向けた4つの観点からの取組

#### ① 「欠席日数を増やさないためのルールづくり」

##### 【指導・支援の手立て】

- ・ 2日連続で欠席させないようにする
- ・ 月曜日は必ず登校させる
- ・ 週1回の休みを認める
- ・ 登校時刻に余裕をもたせる

#### 〈A児〉

母親が会社に出勤する際に学校に送る方法で登校が続いていた。当初、朝すっきり目覚められないと登校を渋ることが多かった。母親もA児が起きない場合は、学校に欠席連絡をしてもらうことがあった。欠席日数を減らして継続登校をさせるためには、休み明けの月曜日の登校が重要である。週末の土日から続けて休むと3連休となり、不登校傾向を助長することになるためである。また、平日でも連続した欠席を認めると、次の登校に抵抗感をもつようになることが予想されたため認めなかった。A児に対して特に重視したことは、朝、母親が登校できないと判断した場合も、午前中に登校させるように働きかけ、登校後に学校で過ごす時間を増やしたことである。それにより、学校で生活するリズムを取り戻すとともに、家族以外の人と会話をするなど接点を広げることができると考えた。

#### 〈B児〉

6年生までの本人の状況や家庭環境から考えて、継続登校への急激な変化は期待できなかった。毎日登校させるのではなく、本人の判断で週に1日程度の欠席を容認することにした。これにより「1日は休める」という心理的な余裕をもたせることができ、反対に週4日の出席ができるようになった。起床が遅く、登校時刻に登校できない場合は、3時間目までを目標に登校させるように努めた。保護者も含め、決められた時間に行動することが負担となって、登校に抵抗感をもつことを避けるためである。B児に対して特に配慮したことは、こちらの要求が多くなるとすべてを拒絶してしまう傾向があるため、幾つかにしばって指示し、それ以外の自由度を高くしたことである。

#### ② 「指導を受け入れやすくするための人間関係づくり」

##### 【指導・支援の手立て】

- ・ メンタルフレンド的な関わり方を継続する
- ・ 負担となる学習課題を削減する
- ・ 休憩時間の過ごし方を工夫する

#### 〈A児〉

A児は、他の女子児童に比べ、幼児性の高さを感じるが多かった。そこで高学年の児童よりも、むしろ低学年の児童に対するような接し方を心がけた。例えば、登校後逃げ回ってなかなか校内に入ろうとしない時には、私はA児をおにごっこのように追いかけた。また、座ったまま動こうとしない時には、横に座って話しかけるなど、可能な限り急がずに、一緒に行動するよう努めた。休憩時間も友達のいないA児を呼んで、話をしたり、課題に取り組ませたりした。音読や漢字の学習など、毎日取り組むことになっている学習も提出は全くなく、家庭学習にはほとんど取り組もうとしない。そうした課題が登校の負担にならない程度に配慮しながら取り組ませるようにしたため、学力の伸長は期待できなかった。学力の伸長よりも学校に足を向けさせ、人と接することで何かしら面白さを感じてほしいと願った。

#### 〈B児〉

B児の登校を喜び、友達に近い感覚で会話ができるように努めた。自由な雰囲気の中で同じ目線で話ができることは、子どもたちの内面を知る上で大切なことである。ただし、そうした接し方をしているにもかかわらず、子どもを上位にしない関係作りを心がけた。特にB児は、家族に対する批判的な言動が多かった。また、学習に対する意欲が乏しく、課題の提出はA児以上に期待できなかった。テストは受けさせるが、それ以外の課題に対してはゆるやかに取り組ませるようにした。立体パズルや簡単な体力増進器具など、児童が休憩時間に自由に取り組める道具を教室に置き、友達と一緒に取り組んだり、学級担任と話し合ったりしやすい状況を作り出すように配慮した。特に体力増進器具

はちょっとしたコツがつかめないと長時間動かすことができないため、以前に扱ったことのあるB児は、得意気に友達に動かし方を教えていた。しかしながら運動が苦手なため、誘っても体を動かすことは少なかった。その分、図書室に行って本を読んだり、教室でたわいのない話をしたりして過ごす機会が多かった。

### ③ 「登校させるための保護者の協力体制づくり」

#### 【指導・支援の手立て】

- ・ 自家用車による送迎を認める
- ・ 早めの就寝時刻を設定させる
- ・ 電話連絡と家庭訪問を実施する

〈A児〉

起床が遅く、他の児童と一緒に集団登校することができないため、母親の自家用車による送迎を継続した。下校は1人で問題なくすることができた。前日の就寝時刻が遅いため、起床が遅くなり、朝すっきりと起きることができないことが不登校の要因の一つと考えられた。そこで、できるだけ早めに就寝させるよう母親に伝えた。また、登校を渋るA児の状況を知るために、欠席の場合は必ず学校へ電話連絡をするようお願いした。学級担任が直接話せない場合は、別の教員が受け、その後学級担任が母親と話すようにした。継続登校のためのルールが守られない場合は、授業の空き時間を利用して家庭訪問を実施した。

〈B児〉

生活のリズムができていないため、起床や朝食が遅くなることがほとんどである。登校が遅れる理由を保護者から連絡してくることはない。欠席の場合のみの連絡であった。2時間目を過ぎても登校しない場合は、こちらから電話連絡をして登校を促した。また、保護者不在で登校させることができない場合は、学級担任が授業の空き時間に家庭訪問を実施した。姉の影響で夜遅くまでテレビを見て、就寝時刻がかなり遅いこともあるようであった。保護者もそれほどB児に対して、早い就寝を促している様子はいかたがえなかった。

### ④ 「登校後の級外職員の支援体制づくり」

#### 【指導・支援の手立て】

- ・ 学級担任以外の職員に対応してもらう
- ・ 保健室登校から自教室へ来るように促す
- ・ 保健室登校から図書室登校へ移行する

〈A児〉

当初は児童玄関から校舎に入ることができず、職員玄関から入るようにした。学級担任が授業中で登校時に対応できない場合は、教務主任や養護教諭など級外の職員が対応し、いったん校内に入れて待たせ、学級担任に連絡をとるようにした。気分が優れなかったり、意に反して登校したりしたときなどは、職員玄関から動かないこともあった。しかし、休憩時間に学級担任が迎えに来ると、教室までは自分で足を運ぶことができた。同世代の子どもたちよりも大人と話をすることが好きであるため、職員との話には積極的に加わった。保健室登校にする必要はなく、登校後に迎えに行けば教室に来ることができた。

〈B児〉

直接教室に来ることができないことがほとんどであり、いったん保健室に登校させ、その後、休憩時間に学級担任が迎えに行く方法をとった。しかし、自分から教室へ行こうとせず、保健室で過ごす時間が増えたため、養護教諭と相談して方針を変えた。より自教室に近づくために、6年の教室に隣接する図書室への登校とした。母親も職員玄関前で降ろすだけでなく校舎内に入り、図書室まで送るようになった。授業途中で登校した場合は、そこで本を読んで次の授業の開始まで休むこともできた。読書好きのB児にとっても、学級担任にとっても有効な「待ち合わせ場所」となった。徐々に保護者が送らなくても自分から図書室に行くようになっていった。しかし、直接教室に来ることはなかった。

## 4 実践の結果

### (1) A児の変容

母親の自家用車による送迎はあるものの、1時間目の開始に間に合うように登校することができるようになった。職員玄関からではなく児童玄関から登校するまでになった。出席状況は表3のようになり、欠席日数を約30%減らすことができた。一時、欠席が増える様子も見られたが、学級担任が早期に家庭訪問をして登校を促した後からは、欠席せずに登校できるようになっている。学習面では課題はあるものの、新出漢字の練習に進んで取り組むなど学習に



対する意欲を見せるようになった。音読や漢字などはほぼ毎日取り組んで記録カードや学習ノートを提出している。9月の欠席日数は、腹痛による1日のみであった。

## (2) B児の変容

母親の自家用車による送りはあるものの、2時間目途中で登校し、3時間目から授業に参加できるようになった。出席状況は表3のようになり欠席日数を50%以上減らすことができた。直接教室に来られないときは保健室で休憩をとっていたが、1学期の後半から自教室のある3階まで来て、図書室で本を読みながら3時間目の開始を待つようにしている。現在は3時間目開始前に自分から教室に来て、学習の準備をするまでになっている。

運動会の行われた5月に欠席が増えている。運動に苦手意識の強いB児にとって、徒競走や学年リレーの練習は負担が大きく、参加したくないという思いが強いことがうかがわれた。週1回の欠席を認めているため、それをほぼ水曜日に実行し、欠席日数が20日となってしまった。それでも、本人、保護者ともに継続登校のために努力しているという意識が強い。9月の欠席日数は4日であった。

表3 A児・B児の5年生3学期と6年生1学期の出欠席状況の比較

	項目	5年生 3学期	出席日数に しめる割合	6年生 1学期	出席日数に しめる割合	日数の 比較増減	割合の 比較増減
A児	欠席日数	26	49.1%	15	19.2%	-11	-29.9%
	遅刻・早退	15	28.3%	24	30.8%	+9	+2.5%
	出席日数	27	50.9%	63	80.8%	+36	+29.9%
B児	欠席日数	42	79.2%	※20	25.6%	-22	-53.6%
	遅刻・早退	11	20.8%	54	69.2%	+43	+48.4%
	出席日数	11	20.8%	58	74.4%	+47	+53.6%

※B児の6年1学期の欠席日数の中には、家庭の事情による事故欠1日と発熱による病欠1日も含まれる。

## 5 考察と今後の課題

### (1) 「欠席日数を増やさないためのルールづくり」

4つのルールはほぼ守られている状態である。登校時刻は、A児は朝会后、B児は2時間目途中であることが多い。ルールがやぶられそうになり、保護者では対応しきれないために学級担任が家庭訪問をして登校を促したのは、A児、B児ともに1回ずつである。これはルールの必要性を学級担任、保護者、本人の3者が感じ、守ろうと努力した結果であると考えられる。欠席日数を増やさないために、2日連続で欠席させなかったことは効果的であった。A児は5月に1回、B児は運動会の前に3日間連続で欠席した以外は、連続しての欠席はない。また、週1日の欠席を認めることで、心理的に余裕をもって取り組ませることもできた。1日休めることを意識させ、その分、他の4日間を休ませずに登校させることに成功している。これがB児の出席日数の増加につながっていると考えられる。B児は、週5日のうち水曜日に休むことが多い。それぞれ3日間連続の登校が体力的にも精神的にも難しいことを本人が自覚し、自分で判断した結果である。今後はルールの継続を図りながら、週1回の休みをとらなくても継続登校できるようにさせたいと考える。

こうした効果の反面、休みが長期化しないように週の始めと週末を重視し、欠席しないように促したが、実際のところA児は月曜や休日後に4日、B児は5日欠席している。また、金曜日などの週末にA児は4日、B児は1日欠席している。A児の欠席日数の半分は週の始めか週末ということになり、ルールを守ることの難しさを実感させた。

### (2) 「指導を受け入れやすくする人間関係づくり」

「6年生になってから、どうして学校に来るようになったのか？」と2人に質問したところ、B児が「担任の先生がしつこいから。」と笑顔で即答した。こうした会話ができたり、文句が気軽に言えたりするのも、登校のためのルールを守りながらメンタルフレンド的な関わり方を継続してきた結果と考える。心理的な距離が近いことをこうした反応から読み取ることができる。実際、A児もB児も敬語を使わず、日頃から友達同士のような話し方で学級担任と会話をしてきた。それでも、指導する側の教師と指導を受ける側の児童との関係を保ち、子どもを上位に立たせない接し方に努めた。それにより集団生活の中でわがままを抑えさせたり、我慢させたりする機会が多くなった。B児にしてみれば、同じ指示を繰り返し受け、自分に対する対応を変えない学級担任が、融通の利かない、しつこい存在に思えたことであろう。B児は文句を言いながらも、指示に従って行動する回数が増えた。

A児の変化にも目を見張るものがあった。保護者も自分から児童玄関に向かう我が子の大きな変化に対する喜びの

気持ちを伝えてきた。休憩時間は、まだ他の児童との接点が生まれていないため、学級担任の周囲にすることが多い。今後は、友達との人間関係づくりを進めていきたい。また、自立に向かって、家族との関係についてもしっかりと受け止めさせる必要がある。B児は、作文や漢字の習得などの学習に、ここ数年あまり取り組んできていない。中学校に進学しても、大きな課題として残ることが懸念される。現在できることを検討し、取り組まなければならない。

### (3) 「登校させるための保護者の協力体制づくり」

登校は毎日自家用車で行っている。まだ、歩いて登校することは難しいと保護者は判断している。今の生活の状況から考えると、確かに難しいと考える。A児・B児に話を聞くと、就寝時刻などは必ずしも守られてはいないようである。しかし、継続登校に向けて、保護者の理解を得ながら就寝時刻の改善を指導していかなければならない。保護者からも継続登校の意味を認めてもらい、協力を得ることが大切である。一方的なこちらからの指示ではなく、保護者の立場を常に考えて対応していかなくてはならない。電話や家庭訪問により保護者と話をする機会を多くもったことは有効であった。これからも保護者と連絡を密にとり、少しでも共通理解をした上で状況の改善に努めたい。また、中学校への進学に向けて、自力での登校に意欲をもたせていきたい。

### (4) 「登校後の級外職員の支援体制づくり」

年度当初は、級外職員の対応がなくては2人を教室まで連れて行くことはできなかった。B児は登校後、いったん保健室で時間を過ごすことで、精神的に安定するようになった。しかし、その後、保健室にいる時間が延び、なかなか自教室に来られない状況が生まれ、登校場所を保健室から自教室に近い図書室に変更した。保護者も図書室まで送るように協力してくれた。その結果、学級担任もB児の登校状況が分かり、声掛けすることで教室に招き入れやすくなった。学期末になると、A児も母子分離不安の状態から抜け出し、安定した精神状態で夏休みを迎えることができた。学級担任1人での対応では、こうした段階を踏まえた対応は難しい。不登校の状況によって、学級担任以外の教員の関わり方が不登校の改善に大きく影響している。組織として、多くの教員が関わる体制ができると、学級担任の負担を減らすだけでなく、児童を複数の視点から見ることができ、効果的な指導につながると考える。

## 6 今後の課題

2人の不登校児童の欠席日数を1学期は減少させることができた。しかし、2学期以降もこうした状態を維持できると楽観視することはできない。新学期になり、改善の見られた不登校児童の欠席日数が増えたという報告もある。また、今後卒業に向かい、精神的に不安定になることも考えられる。小学生の場合、親の力が圧倒的に強いいため、子どもたちは自分の意思を出し切れないことも多い。まだ精神的な力が弱いので、親が強く意向を示すと、子どもは親の意向に流されてしまう。不登校児童のいる家庭では、子どもが登校していれば問題が解決したと親は思いがちである。しかし、解決までにはまだまだ多くの課題が内在していることに変わりはない。ひきこもり者の33.5%が小中学校のときに不登校経験者であったという調査結果もある<sup>5)</sup>。

子どもが登校しぶりや不登校で訴えようとしている声に真摯に耳を傾け、不登校児童がこれからも継続登校できるように更に指導・支援を重ねていきたい。メンタルフレンド的な関わり方を受け入れさせ、登校のためのルールの大切さを感じ取らせたことが、継続登校への第一歩となった。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省「生徒指導上の諸問題の現状について(概要)」, 2004年
- 2) 新潟県教育委員会「平成20年度学校基本調査速報」, 2008年
- 3) 林 礼子「母さん、早く学校に行きたいよう!小学生編」, 講談社出版サービスセンター, 2001年, 124~126pp
- 4) 長谷川博一「こんにちは,メンタルフレンド」, 日本評論社, 2000年
- 5) 忠井俊明・本間友巳「不登校・ひきこもりと居場所」, ミネルヴァ書房, 2006年
- 6) 黒井昭登「不登校カウンセリング」, 朱鷺書房, 1997年
- 7) 友久久雄「学校カウンセリング入門」, ミネルヴァ書房, 1999年
- 8) 原田正文「不登校・キレ・いじめ・学級崩壊はなぜ」, 農文協, 2007年
- 9) 藤岡孝志「不登校臨床の心理学」, 誠信書房, 2005年